

## 感染症・予防接種レター (第19号)

日本小児保健協会予防接種委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種委員会委員長 加藤達夫

### 予防接種委員会

|     |       |       |       |       |
|-----|-------|-------|-------|-------|
| 委員長 | 加藤 達夫 | 岡田 賢司 | 倉橋 俊至 | 馬場 宏一 |
|     | 庵原 俊昭 | 小倉 英郎 | 小林 清  | 綿谷 靖彦 |
|     | 遠藤 郁夫 | 木村 慶子 | 萩原 誠一 |       |

## 風疹ワクチン 経過措置終了

2003年9月30日で、表題の経過措置が終了し、今後風疹ワクチンの定期接種は生後12か月以上90か月未満の者に限られる。この定期接種が今後とも重要なのは自明のことであるが、本稿では生後90か月以上の者に対する接種について考察する。

### 〈背景〉

風疹ワクチン接種の意義の第一に挙げられるべきは先天性風疹症候群の発生防止である。この意義を踏まえ1977年から中学生女子を対象とした定期接種が行われていた。この定期接種の結果、対象となった年齢層の女子の抗体保有率は95%とも報告され、一定の評価は得た。しかし風疹の好発年齢は5歳～14歳であり、中学生女子のみを対象としたワクチン接種では流行そのものを制御することはできず、1977年以後も数年ごとの大きな流行があった。そして風疹流行年には非流行年の数倍、先天性風疹症候群の発生が報告されていたのである。

その後方針は妊娠中の風疹罹患の防止から、風疹の流行そのものの抑制へと変わった。

1990年にはMMRワクチンの導入も行われた。その後MMRワクチンは中止されたが、1994年の予防接種法改正によりそれまでの中学生女子だけの定期接種が生後12か月以上90か月未満の男女、中学生男女に行われるようになった。中学生の接種は法改正の前後にできる、いわゆる谷間の世代に対する経過措置であった。さらにはその中学生の接種率が極めて低かったため、2001年の予防接種法一部改正で経過措置の対象者がさらに広げられた。

そしてこの経過措置の期間が昨秋終了した。

### 〈接種率〉

1994年の改正後しばらくの間、中学生の風疹ワクチン接種率が低いことはたびたび話題に上っていた。厚生労働省の計算によると中学生の接種率は1995年～2000年では45.6%～55.9%。2001年は特に低く38.6%である。2002年からの数字は現在手元がないが、経過措置終了直前に多数の接種が行われたという風評は聞いていない。

### 〈今後の課題〉

当時の中学生が現在22～24歳くらいであろう。この風疹ワクチン接種率の低い年齢層がこれから妊娠出産の時期を迎える。今後風疹の流行が起こった場合には風疹感受性者が妊娠中に風疹に曝露される可能性が大変高い。つまり、先天性風疹症候群の発生頻度の増加が危惧されてならない。

風疹の定期接種を徹底し、流行を抑える努力は今後一層重要となるであろう。さらに今後妊娠するであろう年齢層の女子への対策も忘れてはならない。

今こそ医療従事者、学校関係者は風疹ワクチン接種の意義を再認識すべき時であろう。

まず風疹ワクチンの重要性を児童生徒またその保護者達に十分理解してもらう必要がある。

経過措置も終了し、今後は生後90か月以上の児童生徒、および成人は任意接種で風疹ワクチンを受けることになる。経済的な負担もかかってはくるとは、必要性が十分認識できれば、接種希望者は増えるはずである。

任意接種希望者の増加で記憶に新しいのは、2003～2004年のシーズンにおけるインフルエンザワクチンの接種希望者増のことである。ウイルス、ワクチン製法、法律とも前年とほぼ同じであったのに接種希望者が増

加した。理由はいくつかあろう。前年度のオセルタミビルの欠品, SARSとの関連, ワクチンの品薄を伝える各種報道その他。あるいは, あまり本質的ではない風評も加わって, 今回の人気高を呼んだのかもしれない。いかなる理由にせよ, インフルエンザワクチンが人々の注目を得たことは疑いない。なにか風疹ワクチンが注目されるような契機はないだろうか。

先天性風疹症候群の発生が実際に増加する前に風疹ワクチンの接種率が向上することを願ってやまない。本稿を読んで下さった方の周囲で1人でも2人でもワクチン接種を受ける人が増えれば幸いである。より多くの人々が風疹ワクチンに関心を持って下さることを願いながらこの稿を終わる。 (文責: 萩原誠一)

#### メモ

##### 《先天性風疹症候群》

免疫のない女性が妊娠初期に風疹に罹患すると, 風疹ウイルスが胎児に感染して, 出生児に先天性風疹症候群と総称される障害を引き起こすことがある。

先天性風疹症候群の3大症状は先天性心疾患, 難聴, 白内障である。

風疹の流行年と先天性風疹症候群発生の多い年度は一致している。

予防で重要なことは, 十分高い抗体価を保有することであり, すでに自然感染で免疫を獲得していることが明らかな者以外は風疹ワクチンで免疫を付ける必要がある。